

—— 天邪鬼（あまのじゃく）の第三の人生 ——

理事 大屋弘一

大阪・関西万博が閉幕した。皆さんは来場したのだろうか。僕の周りの人たちも何回も行ったという人がたくさんいたし、大屋根リングは一見の価値ありという感想をよく聞いた。僕は行かなかった。（一部は再利用するらしいが）6ヶ月で建築物・設備を使い捨てるという思想が気に食わない。大屋根リングも再利用するというが、大きな「ほぞ穴」の開いた木材の使い勝手は決して良くない。1970年の大阪万博にも行かなかった……。けどもし何年か先にもう一回開催されたら、世界一周旅行するつもりで行ってみようかな、冥途の土産に。

ミャクミャクも大人気だったようだが、昨年末、大腸癌検診に引っ掛かり生検を受けた僕にとっては腫瘍を想起させ、忌避させたのかもしれない。ミャクミャクといえばそのコスプレを着た若者が、阪神タイガースがリーグ優勝した時、大阪の繁華街・道頓堀に飛び込んだそうだ。

本会 [創立 20 周年記念文集](#) の中（6P）で、2023年に18年ぶりに優勝したことに絡めて「次回、阪神タイガースが優勝する時には、大阪の水環境はどのように進化しているであろうか」なんて書いてしまったが、2年後に優勝してしまった。「カーネル・サンダースの呪い」ならぬ「ミャクミャクの呪い」がないことを切に願う。

今シーズン阪神タイガースの最後はちょっと残念な結果に終わったが、野球が老若男女に人気があるのは、勝ったり負けたり、打ったり打たれたり、それが自分の人生に投影されるからではないだろうか。ちなみにこの2年では、道頓堀の水環境



はあまり変わっていないが、地上・街中はオーバーツーリズムのせいだろうかゴミだらけになり、嘆かわしい限りである。

この8月中旬に立山、下旬に白山に登った。9年前に富士山にも登

ったので、これで日本三霊山を制覇したことになり、今後どんな御利益があるか楽しみにしている。田部井淳子さんは「人生は8合目からが面白い」と言ったそう。さて私の人生どう楽しもうか。

2025 年度活動報告

資源活用型下水道システム（SKG）部会研究集会報告

顧問 清水 治

10月31日馬事畜産会館において、SKG研究集会「ますます進化・拡大する下水熱利用」をテーマに、会場29名、オンライン31名が集まり開催いたしました。

当会理事村上孝雄の司会で、理事長栗原秀人と（一社）日本下水道施設業協会原田一郎専務理事の挨拶から始まりました。



まず大阪公立大学都市科学・防災研究センター・中尾正喜特任教授による「下水熱利用技術と普及へ向けた課題」をテーマに下水の時刻変動と年間温度の安定による管渠内からの熱利用方法や、海外における実績等の話がありました。

引き続き、国土交通省水管理・国土保全局上下水道企画課・尾崎智弘課長補佐より「2050年カーボンニュートラルの実績に向けた下水道事業における取組について」をテーマに、下水道の省エネ推進の国からの補助金対策や、下水道が有する資源・エネルギーと脱炭素社会の実現に貢献する下水道の姿を紹介されました。

また、東京都下水道局計画調整部・山田英樹担当課長から「東京都における下水熱利用」をテーマに、都における下水道事業の地球温暖化防止計画「アースプラン2023」による、都市の下水からのヒートポンプを用いる冷暖房実施例の説明がありました。

さらに、豊田市上下水道局企画課・新岩康正課長より「豊田市の下水熱利用」をテーマに、都市の再開発事業における下水熱利用の実施例として下水道管内・熱交の実施とエネルギーサービス業者との取組分担等のテーマを説明されました。

引き続き、新潟市下水道部下水道計画課・佐藤公康課長より「循環型社会への転換に向けた下水道熱利用の取組と今後の展望～融雪利用の実施例～」をテーマに、冬季における下水からの熱回収にかかわる、道路の融雪システム等の提案がされました。

最後に、当会理事の鈴木穰の司会で、講演者と会場との総合討論を実施しました。

「荒川・下水道フェスタ 2025」 出展報告

理事 押領司重昭

埼玉県と埼玉県下水道公社の主催により「荒川・下水道フェスタ 2025」が10月11日(土)に荒川水循環センター上部公園



(戸田市下笹目)で開催されました。今年も水コン協関東支部との共催により当倶楽部もブースを出展しました。昨年同様、小雨の中での開催となりました。フェスタ来場者が約1,000名、水コン協・水倶楽部ブース訪問者が約250名(カウントした子供たちが146名、同伴の保護者を

7割で計算)でした。

出展ブースの説明員には、水コン協関東支部から5名、当倶楽部から6名が参加しました。ブースの訪問者に下水道の仕組みを理解してもらうために大型パネルを設置しました。この他に水コン協関東支部から「協会の活動」のパネルを、当倶楽部から「水倶楽部の活動」のパネルを展示しました。

下水道に関するクイズを三問出題しました。問1は、「規模(処理能力)が日本一の流域下水道がある都道府県はどこでしょうか？」(①東京都、②大阪府、③埼玉県)、問2が、「下水処理場では汚れた水をきれいにしています。どのようにしてきれ

いにしているのでしょうか？」(①川の水で薄める、②微生物の力を借りてきれいにする、③洗剤や薬できれいにする)、問3が、「皆さんが下水道を使うときに守っていることは、次のうちどれですか？」(①油を流さない、②トイレットペーパー以外の紙をトイレに流さない、③危険なもの(ガソリンなど)を流さない)です。問3は、適切な下水道の使用を啓蒙するため、昨年と同じような問いにしました。

クイズ参加者へのノベルティには、オモシロ消しゴム、ミニサボテン、マーカーペン、どうぶつ付箋、災害時用ろうそく、微生物クリアファイルを用意しました。また、協会、当倶楽部の活動を紹介したリーフレットも配布しました。

開催地にちなんだ問題で、皆さん興味をもって答えていただきました。また、問3については、全てが正解と答えた人が多く、下水道使用の関心の高さを感じました。

雨の中でしたが、ブース訪問者が絶える時間帯は少なく、充実した出展となりました。



2025 東京湾大感謝祭の報告

顧問 亀田泰武

昨年に引き続き横浜市役所1階のアトリウムでの開催となった。時期は昨年同様9/27土、28日の月末二日間。イベントの規模は昨年と同じで、個々の出展者ブース案内のあるチラシも作成されていた。キッチンカーも数台出動していた。

会場スペースが昨年同様狭く、割り当てられた場所は主会場から通路対岸の場所で両側に関東地方整備局、都や横浜市の環境局、港湾局、横須賀市などのブースが並ぶ。場所が通路の一番手前と昨年に比べずっと好条件で、奥は昨年同様ゆるキャラなどの撮影会場であった。ブースは幅98cmの2連の壁パネルに、幅98cmの袖壁パネルで囲むもの。一番手前の袖はなく、引っ込んだところに。4枚の壁パネルに5枚の展示パネルを貼った。パネルは、これまで調査した干潟の特徴



を示した東京湾の干潟の姿、移動するツメタ貝など過去の写真を貼り付けた東京湾の干潟のスナップ、合流式下水道の説明、下水処理場の図解、奇跡の一枚の微生物画像集、NPO の紹介の5枚。イーゼル設置のクイズに誘い、興味のありそうな人にパネルの説明をおこなった。 東京湾の横須賀から船橋までの



53kmの区間で、海面が一番膨らんだ所の各種高さ（高さ22cmから220mまでほぼ3倍の間隔で並

んだ7個)のなかでどれかを選んでシールを貼ってもらうもの。貼られたシール数は354枚で、昨年訪問者200人内外より大幅に多く、場所の有利さを実感した。地球の大きさから、そんなに膨らむとはないと感覚的に感ずるが、回答の多かったのは中央の5.5mで67枚、端から2個目の正答の5.5mも59枚とけっこう多かった。隣のブースにいた潜水士はすぐ正答を答えてくれた。よく船に乗るという中年の女性も正答だった。

来訪者が多く、景品のクリアファイル100枚、大貫理事作成のひょうたん30個は午後になくなった。同数用意した日曜日午後になくなった。

展示ホール主会場では、GKPが東京ワンダー下水道を出展していた。ステージでは水の天使登場し、子供達のトイレトペーパーとティッシュペーパーの水への溶け具合の実験をおこなっていた。

会員だより

徒然水草 其之拾巻 「ちゃんハラ」

嫌気好気法師

先日、あるハラスメントのニュースを目にした。「40代の女性社員が『〇〇ちゃん』と呼ばれ続け、それが苦痛で、うつ病を発症して退職した。女性は元同僚男性を訴え、慰謝料支払いを命じる判決が出た。」というものだ。筆者も職場で「ちゃん」を使うことがあるので、これは衝撃的だった。

職場で誰かを「〇〇ちゃん」と呼ぶのは、そう珍しくはないことだろうと思うが、判決では「ちゃん付けは幼い子どもに向けたもので、業務で用いる必要はなく、不快感を与えた。」という判断が下された。「〇〇ちゃん」は、親しみの表現の場合が多く、必ずしも見下している訳ではなからうと思うが、呼ばれる方は苦痛だとすれば、これは無意識のハラスメントだ。これか

らは「ちゃんハラ」には要注意だ。

セクハラ、パワハラ、モラハラ、カスハラ等、ハラスメントは増加の一途だが、パワハラと聞くと今でも思い出すことがある。もう30年以上前だが、当時、筆者は前職場で、ある事業を担当していた。寒くなる頃、OK省RZ局に予算要求説明をするのだが、担当係長が瞬間湯沸器のような人で、毎回、説明を始める否や、すぐにキレて逆上、怒鳴り散らすという有様だった。溜まったストレスを発散していると思え、毎夜呼び出され、深夜まで暗く寒い廊下で待たされた挙句、散々に罵倒されるのでは堪ったものではない。現在では、文句無しの立派なパワハラである。

さて、その夜も係長氏は悪鬼の如き形相で怒り狂い、最後には「出ていけ！」と怒鳴った。当方の出席者一同は、誰も俯いて言葉も出ない。気まずく長〜時間が過ぎてゆくばかり。係長氏の対面にいた筆者は「これはもう仕方ない」と思って立ち上がり、頭を下げ「それでは帰ります」と部屋を出た。他のメンバー達もゾロゾロと続いた。

翌朝のこと、OK省から出向していた某課長が来て、「昨夜は『帰れ』と言われて帰ったそうだな！」と大笑いした。何でも、係長氏から「帰れと言ったら、本当に帰ったけど、どうなってるんだ？」と電話があったらしい。こうゆう場合は、お怒りが収まるまで、泣きそうな顔で頭を垂れているというのが作法なのだそう。当時の霞が関では、このような「厳しい御指導」は珍しくなかったのである。

最近、筆者もハラスメントの被害者だと感じることもある。それは「スメハラ」だ。スメハラは、匂いや香りによるハラスメント。この頃、若者中心に、香水や整髪料のかなり強烈な匂いを振りまいている人が多い気がする。甘ったるい匂いだが、電車やエレベーターの中でこれに遭遇すると相当きつい。嗅覚過敏症の人は辛いだろう。問題は、匂いを振りまいている本人は何も感じていないところだ。考えてみれば、これは「ちゃんハラ」も同じだ。ここが各種ハラスメントに共通する根源的な問題なのだと思う。

編集幹事のあと整理

- 僕は、で始まる大屋理事の巻頭文。私は少年時代しか使っていませんでした。お気持ちは若いのですね。立山、白山の登山の身体的にも。僕は若いときの思い出になってしまいました。
- 村上嫌好法師からの其之拾壹。前回までは読み過ごしていたが、今回は話の関係者になりました。某省の係長勤務のとき村上法師の某団に厳しく当たりました。望月係長だけでなく、並み居る全係長が、ですよ。そのため某団では某省係長毎の対策マニュアルを作成していました。望月係長対策は5時近くに案件を持ち込むとスムーズになる、というものでした。理由は？そろそろ帰宅時、だからではありません。
- 会員だよりコーナーへの投稿を募集しています。投稿はいつでも受け付けます。直近の号に掲載します。投稿要領などは望月から毎回お出ししている原稿依頼メールをご覧ください。

編集幹事・望月



インド・ラダック高地を流れるインダス川源流